

のよしあしのことわり」を論じた思索、そこには一応「よしあしのことわり」があるわけだが、その思索をつづけた究極は大虚において自証されるべきなのであつた。いえば、無限に思索されるべきものを望見しながら、一時思索を中止する。といつてもこゝでやるめわけではない。絶対者へ

受贈誌(昭和三十三年一月—三月)

日本文学	一—三月号	日本文学協会
日本文学研究	第二号	日本文学研究会
文学史研究	第七号	文学史研究会
甲南国文	創刊号	甲南女子短期大学
上代文学	第九号	国語国文学会
人文科学研究	第八号	明治大学人文科学研究所
説林	創刊号	愛知県立女子大学
駒沢史学	第六号	駒沢大学史学会
女子大國文	第八号	京都女子大学国文学会
万葉	第六号	万葉学会
国語学	第三十一号	国語学会
国文学	第三十号	関西大学国文学会
国文研究	第六・七号	九州大学国文学会
国文学	第三卷一—四号	学燈社

のおそれであり、すべては自己という人間に回帰してくるものであつたからである。  
①「ささめごと」の本文はすべて、木藤才藏著「校註ささめごと」によつた。

学大國文	創刊号	大阪学芸大学
明治学院論叢	第四十八号	国語国文学研究室
実践文学	第一・二輯	明治学院大学文経学会
文学論叢	第三号	実践女子大学
横浜大学論叢	第十号	東洋大学国語国文学会
国語	第九卷	横大
滋賀国語国文学	系列一・二	東京教育大学
北海道学芸大学紀要	六卷三・四	国語国文学会
滋賀大学学芸部紀要	第三号	滋賀大学国語国文学会
西京大学学術報告	一卷一号—八卷	北海道学芸大学
佐賀学芸会紀要	第七号	滋賀大学学芸学部
日本大学世田谷教養部紀要	第九号	西京大
奈良学芸大学紀要	第五号	佐賀学芸短期大学
	第六輯	日本大学世田谷教養部
	第七卷第一号	奈良学芸大学

# 西鶴の描写の特質

—その並列描写と類型性について—

## 水田潤

西鶴の描写の特質は、写実の即物性にあるとされている。それは、無情なりアリズムによつてつらぬかれ、冷酷むざんであるとともに、そのリアリズムの簡潔さ、軽妙さは、西鶴の描写を特色づけている。

西鶴文学の描写については、かつて近藤忠義氏によつて、「新題材の発見は、当然、新しい美——旧い標準に制せられず町人独自の審美眼にたよる新しい美——の発見を伴うて来ざるをえない」(『西鶴』二七六)と指摘せられたように、まず先行文学の概念的な描写とはちがつた具象性と写実性が言われる。

先づ年は十五より十八迄、当世顔はすこし丸く、色は薄桜にして、面道具の四つ不足なく揃へて、眼は細きを好まず、眉あつく、鼻の間せはしからず次第高に、口ちひさく、齒並あらあらし

白く、耳長みあつて縁あさく身をはなれて根迄見へすき、額はわざとならずいねんのはへどまり、首筋立のびてをくれなしの後髪、手の指はたよわく長みあつて爪薄く、足は八もん三分に定め親指反つてうらすきて、胴間つねの人よりながく臆しまりて肉置たくましからず尻付ゆたやかに、物越衣装つきよく、姿に位そなはり心立おとなしく、女に定まりし芸すぐれて万にくからず、身にほくろひとつもなきを——

よく引かれる『好色一代女』巻一「国主の艶妾」の美女の容貌、姿態の描写である。これは、西鶴にとつては、写実の新感覚であり、同時にまた描写技法の完成であつた。西鶴の浮世草子が、読者庶民に歓迎された理由の一つにも、この描写の写実性は、重要な役割りを果たしたと思われる。しかし、西鶴の描写は、この段階で固定し図式化しているようにみえる。これもよく引かれる例であるが、『好色五人女』巻三「姿の関守」の次の描写との類似に注意した

い。  
年の程三十四五と見えて、首筋立のび、目のはりりりんとして、顔のはへぎは自然とうるはしく、鼻おもふにはすこし高けれど、それも堪忍比なり。……さりとて子細らしき物好、帯は數瓦の折ひろうど、御所かづきの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪踏音もせずありきて、わざとならぬ腰のすはり……間もなく其跡より十五六にはなるまじき娘、母親と見えて左の方に付……顔は丸くして見よく、目にりはつ頭れ、耳の付やうしほらしく、手足の指ゆたやかに、皮薄ふ色白く――

いちいち対照するまでもない。ここに描かれているのは、いづれも、抽象された美女のいくつかの要素にすぎない。描写は、いきおい非個性的とならざるをえない。近藤氏にしたがえば、女性描写の「生々躍動する新鮮な美」や、「衣裳の描写」のけんらんさ（ここでは省略したが「姿の閑守」に衣裳の描写が見える。）は、「満腔の自恃を以て、町人生活の豊かな現実の姿を誇示し、謳歌しようとする所から生じる、生き生きとした写実的態度に発するもの」であり、当時の町人たちの力強い自己主張として説かれているし、暉峻康隆氏によつても、「彼以前の文学に求めることのできない人間の美しさは、命をぢかに見詰め、そしてそれを正直にスケッチすることによつてかちえたもの」「洗練された豪華な服装を、自分のぞくする階級の生活力の象徴とし

あいまつて、このことを典型的に示している。

- (1) 大晦日の貧家のやりくりの「序」
- (2) 相借屋六七軒の総括的な叙事……並列的
- (3) 一軒ごとの越年風景の点描（質入れの描写……並列的）
- (4) ねだり浪人の妻の、質屋でのねだりの描写
- (5) 浪人の家の隣に住む後家のゆうゆうとした正月したくの描写……並列的
- (6) その奥に相住の銭、八文で年を越す女の描写
- (7) 西鶴の「述懐」……「まことに世の中の哀れを見る事、貧家の辺りの小質屋、心よはくはならぬ事なり。脇から見ると、悲しき事の数々なる年のくれにぞ有りける。」

構成から、あえてこの編の中心を求めるとすれば、(4)のねだりの場面であるが、それよりも、この編の意図は、それぞれの挿話を一つの断面とするどん底の人間生活の描写にあつたと思われる。挿話の配合もよくまとまつている。西鶴の説話の挿話性と、その弱さについては、さきに「日本文学」四月号に発表の拙稿「西鶴文学の発想」で指摘したが、ここでは、一つ一つの挿話は、構成上からもたくみにその主題に統一せられている。

ところで、(2)に「みな質だねの心当あれば、すこしも世をなげく風情なし。……万の世帯道具、あるひは米・味噌・焼木・酢・醤油・塩・油までも借人なければ……」と、

と讚美し、主張しようとする精神が底流している」と説明されている。しかし、これらの描写の中に、はたして生々躍動する新鮮な美や、命をぢかに見詰めた人間の美しさが創造的に感じとれるであろうか。美女がすべて「当世顔はすこし丸く」の典型で示されたように、ここでは、風俗図的な平板な描写に固定した西鶴の写実の限界が指摘されねばならない。そして、このことはたんに美女の描写の問題だけではなく、西鶴の描写の特質であり、それがひいては西鶴文学を決定づけているように思われる。この稿では、問題をこうした面から見ようとした。問題の足がかりは、主として『世間胸算用』の中に求めたが、これは、この作が、西鶴晩年の傑作の一つであり、主題の設定と、作品構成と描写の面から、ここに西鶴文学の一応の完成が言われ、その肯定面、否定面ともに、ここにはいくつかの問題点が、西鶴の没する前年、元禄五年という時点において示されているからである。

## 2

西鶴の描写の特質の第一には、まずその叙事的な並列手法があげられる。このことは、さきの女性の容貌、姿態、衣裳の描写にも示されていたが、たとえば、『世間胸算用』巻一「長刀はむかしの鞘」では、説話構成の並列手法とも

その一端を示す描写の並列性は、(3)では、

一軒からは古き傘一本に綿練一つ、茶釜一つ、かれこれ三色にて銀壺刃借て事すまじける。又其隣には、かかが不斷帯くはんぞこよりに仕かへて一すじ、男の木綿頭巾ひとつ、蓋なしの小重箱一組、七半の箆二丁、五合榎壺合榎二つ、湊焼の石皿五枚、釣御前に仏の道具添て、取集て二十三色にて、壺刃六分借て年を取りける。

と典型的に示されている。また、(5)でも、後家の正月したくの描写は、この方法によつている。

はや極月初めに万事を手廻しよく仕廻て、割木も二三月迄のたくはへ、看掛には二番の鱈一本、小鯛五枚、鱈二本、かんばし、ぬりばし、紀伊国五器、鍋ぶた迄さらりと新しく仕替て、家主殿へ目ぐろ一本、娘御に絹緒の小雪踏、お内儀様へうね足袋一足、七軒の相借屋へ餅に午券一抱づつ添て、礼儀正しくとしを取りける。人の知らぬ渡世、何をして内証の事はしらず。

この叙事的な並列描写は、巻一「問屋の寛瀧女」でも「是借錢の山高ふしてのぼり兼たるほだし、それぞれに子といふものに身軀相應の費、さし当つては目には見えねど、年中につもりて、はきだめの中へすたり行はま弓、手まりの糸屑、此外雛の摺鉢われて、菖蒲刀の箔の色替り、踊だいをこをうちやぶり、八朔の雀は珠数玉につなぎ捨られ、中の玄猪を祝ふ餅の米、氏神のおはらい団子、弟子朔日、厄払ひの包銭、夢違ひの御札を買など、宝舟にも車にも積余

るほどの物入……」と、子どもの玩具の並列（季節の順に並べられている）で描写を成功させているし、巻五「つまりての夜市」や「長久の江戸棚」などでも成功している。西鶴にとつてこの方法は、いうまでもなく俳諧の方法であり、軽妙洒脱、成功すれば西鶴独自のリズムをつくる。西鶴の描写がしばしば悲惨な暗黒面を描きながら、明かるくユーモラスであるのも、この手法に負うところが大きいし、さきの(3)の点描が散漫でなく、たくみに点描としての変化とおもしろさを発揮するのも、この描写技法によつてい(5)の後家の描写も、簡潔のうちによくその充足ぶりを描いている。とくに、ここではそれらが、さきの貧しさとの対照において、とりあわせのたくみさを示しているし、文末の「人の知らぬ渡世、何をかして内証の事はしらず」の転化の老巧さによつても、このことは一層効果的になつてい(る。しかし、この手法は、しばしば図式化し現象の並列列挙とその対象処理の平板さによつて類型化し、造型のいとなみを弱めている。

さるほどに今時の女、見るを見まねに、よき色姿に風俗をうつしける。……傾城と地女に別に替つた事もなければ、第一気がどんで、物がくどふて、いやしひ所があつて、文の書やうが違ふて、酒の呑ぶりが下手で、歌うたふ事がならひで、衣装つきが取りうけて、立居があぶなふて、道中が腰がふら／＼として、床で

さはあつても、それは、あくまでも挿話でしかなかつた。そこには、作者の現実追求の当為は感じられない。

西鶴の人物描写が、類型的であり、姿態や容貌や行為が一つの型としてしか描ききれず、その写真も、この限りでの限界をしかもちえなかつたということは、つまり、西鶴の文学が、この面でも、遊女評判記や役者評判記からの系譜をじゆうぶんに断ちきつていないことを物語つてい(る。これら評判記の類では、人間は、享楽の対象としての遊女や役者として、その姿態や容貌が、その属性として特徴的に描かれればよかつた。もとより、西鶴の写真がこれら評判記と同一であるはずはないし、右の諸例がそうだとい(うのではない。同じく女の服装、容貌を描くにしても評判記のそれと質的に異なつてい(る。

しかし、それにもかかわらず、さきの「先づ年は十五より十八迄、当世顔はすこし丸く、色は薄桜にして……」や「年の程三十四五と見えて、首筋立のび、目のはりりんとして……」をはじめとする人物描写の類型の中には、どうしても、評判記の方法のなごりの否定できぬものを感じ(る。評判記の類は、テーマとしてその好色面を浮世草子にひきつぎ、『好色一代男』や『好色二代男』を規定したばかりでなく、写実技法においても、西鶴をとらえていたと思われ(る。

味噌塩の事をいひ出して、始末で鼻紙一枚づゝつかふて、伽羅は飲ぐすりと覚へて……(尤始末の異見)

ここにいたつては、これは描写というよりは、叙事であり説明である。しかもここではこの方法は、描写に克明をきわめようとするあまり、誇張され、強調され、列挙されることによつて、戯画的に上すべりし、リアリティを希薄にしている。このことは、たんにこの場合だけにかぎつたことではなく、西鶴文学の描写を特質づけてい(る。手近な二三の例について見てもこのことは容易にうなずかれよう。

何が手前者の子にて、ちいさい時からうまいものばかりで育てられ、頬さきの握り出したる丸がほも見よし。又額のひよつと出たも、かづきの着ぶりがよいものなり。鼻の穴のひろきは、息づかひのせはしき事なし。髪はすくなきは夏涼しく、腰のふときはうちかけ小袖を不断めせば是もよし。爪はづれのたくましきは、とりあげば、が首すじへ取つたためによしと……(尤始末の異見)

此男つね／＼世わたりに油断せず、ひとりある母親のたのまれで、火桶買ふて来るにも、はや間銭取て只是通さず。まして他人の事には、とりあげ祖母呼で来てやるけはしき時も、茶づけ食を喰ふにはゆかぬものなり……(奈良の庭籠)

これらの描写は、西鶴作品中にくらもその類型を示すことができるし、類型化した描写の中には、一つの挿話としてのたくみさや、説話構成上の趣向のうまさ、おもしろ

## 3

人物描写ばかりではない。描写の類型性は他の場合にもあらわれてい(る。

天下泰平、国土万人江戸商心をかけ、其道／＼の棚出して、諸国より荷物、船路岡付の馬かた、毎日数万駄の間屋づき……町すじに中棚を出して、商ひにいとまなく、銭は水のごとくながれ、白がねは雪のごとし。富士の山かげゆたかに、日本橋の人足、百千万の車のごとく聞なしたり。船町の魚市、毎朝の売帳、四方の海ながら、浦／＼に鱗のたねも有事よと沙汰し侍る。神田須田町の八百屋もの、毎日の大根、里馬に付つゞきて数万駄見えるは、とかく畠のありくがごとし。半切にうつしならべたる唐がらしは、秋ふかき竜田山をむさし野に見るに似たり。瀬戸物町麴町の鴈鼻、さながら雲の黒きを地にはへたるがごとし。本町の呉服もの、五色の京染、屋しき模やうのちらしがた、四季一度にながめ、すがたのはなの色香ぞかし。(長久の江戸棚)

この描写は、『日本水代蔵』にいくつかの類型がある。

近代江戸静にして、松はかはらず常盤ばし、本町呉服所京の出現世、紋付鑑にあらはし、棚もり・手代それ／＼に得意の御屋敷へ出入り……利徳に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ、千里にゆくも奉公、朝には星をかづき、秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれ共、以前とちがひ今はん昌の武蔵野なれ共、隅から隅まで手入れして、更に擷取もなかりき。(昔は掛算今は当座銀)

此所は北国の舟着、殊更東海道の繁昌・馬次・かへ駕籠・車を



轟かし、人足の働き、蛇の鮓、鬼の角細工、何をしたらればとて売まじき事にあらず。近年問屋町長者のごとく屋造り昔にかはり、二階に撥音やさしく、柴屋町より白女よび寄、客の遊興昼夜のかぎりもなく、天秤のひびきわたり、金銀も有る所には瓦石のごとし。(怪我の冬神鳴)

日本橋の南詰に曙より一日立つくしけるに、流石諸国の人の集り、山も更にうごくごとく、京の祇園会、大坂の天満祭にかはらず、毎日の繁昌此御時、君が代の道広く、通り町十二間の大道所せきなく、此橋の上に馬乗一人、出家老人、鎧兜筋、朝から晩迄絶る事なく、され共人の大事にかくる物はおとさず、銭を疋文いかなく目に角立てても拾ひがたし。(煎じやう常とはかはる問葉)

描写の事象は異なっているが、その類型性に目をおおうことはできない。この「繁昌」の描写の類型的に示されるのは、同じく『日本水代蔵』巻一「浪風静かに神通丸」の次の部分であるが、それぞれ、右の諸例との異同に注意したい。

難波橋より西見渡しし百景、数千軒の間丸、甍をならべ、白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付けおくれれば、大道轟き地雷のごとし。上荷・茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先をあらそひ、若ひ者の勢虎臥す竹の林と見へ、大帳雲を轟し、十露盤丸雪をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひびきまさつて、その家の風暖簾吹きか

へしぬ。

なお、この描写の類型性、常套性は、たんに描写や修辭技法だけの問題にとどまらず、西鶴の感覚の概念性と、対象認識の安易さを物語ることにならないだろうか。西鶴の描写は、これまで、先行文学や評判記の類との質的なちがいが指摘され、その具象性、即物性が価値的に評価せられてきた。もとよりこれは誤りではない。しかし、こうした肯定的な評価だけでは西鶴はじゅうぶんに理解されたことにはならないだろう。たとえば、右の引用文中の次の描写はどう説明されるだろうか。

(A) 半切にうつしならべたる唐がらしは、秋ふかき竜田山をむきし野に見るに似たり。(長久の江戸棚)  
瀬戸物町麴町の鴈鼻、さながら雲の黒きを地にはへたるがごとし。(長久の江戸棚)

(B) 本町の呉服もの、五色の京染、屋しき模やうのちらしがた、四季一度にながめ、すがたのはなの色香ぞかし。(長久の江戸棚)  
上荷・茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。(浪風静かに神通丸)

(A)は、一応、それぞれ「唐がらし」「鴈鼻」との対照における俳諧性とも理解せられるが、(B)の場合は、先行「恨の介」の「ひすひのかんざしは、あたとたをやかにして、

揚柳の風になびくがごとし、かづらのまゆはあをふして、せいたいが立板に・水を流すにことならず、宛転たりし雙蛾は、遠心の月にあひおなじ」などの概念性と異なるところがない。ここにも中世のなごりを見てとることができると、これは、西鶴の描写のいたるところにあらわれている。これも『日本水代蔵』巻一「昔は掛算今は当座銀」に次の記述がある。

万民の美婦は春の花見、秋の紅葉見……ある時室町のかた脇に仕立物屋の軒かほりて、橋の暖簾掛りて、当世着物の縫出しすぐれて都の手利ありて、絹綿爰に持ちつどひて、さながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし。

描写というよりは説明である。この比喩は、昔、寛平法皇が夏に雪景色を好んで衣笠山に白い絹をかけたという故事によつて起るが、これをそのまま「さながら衣掛山を我が宿に見し事ぞかし」として用いるところや、「万民の美婦は春の花見、秋の紅葉」という表現の中に、はつきりと比喩の観念性が指摘できよう。比喩の観念性といえ、

『一目玉鉾』の中にも、

○固山 此宿東路には人の情もふかし旅人をとまれと小手まねきの女姿もさのみいやしからず髪も兵庫まげに物かたく白粉は雪の曙をあさむき口紅は夕日に移りて……(巻一)

○青葉山 民家京の町に替らぬ繁昌の大所なり屋形町かきりもな

く葦立つ、き久しき城下のしるし諸木枝を垂風に葉音なく静なる国也。(巻一)  
○江戸 ちとせの松風枝をならさず紅葉山に千秋の色まさりて久かたの日影にし丸雲しつかに諸大名の屋形は雪の曙のごとし月むきし野に広く清なれ春は花の朝げしきかはらぬ常盤はし……(巻二)  
と、さきの引用文と同一の発想、描写を見いだすことができる。

この稿では、西鶴の描写の特質を、その否定面からながめてきた。しかし、いうまでもなく、西鶴文学は、その構成、描写のうちに、いくつかの優位性をもっている。次の稿では、この中から、これまで見落されていたと思われる二二三の特質について述べる。(一九五六・一)